

課題名 治山事業実施箇所においてニホンジカが植生に及ぼす影響について

関東森林管理局 治山課 小松 隼人

1 課題の背景と目的

現在、シカの個体数の増加や分布域の拡大に伴って、管内の治山事業地でも食害による緑化不良やそれに伴う被害が発生しています。

そこで、シカの生息密度が高い伊豆署管内にて、緑化不良の治山事業地を選定し、令和7年9月から12月に調査を行い、それぞれの現場の環境とシカが植生に及ぼす影響について比較しました。



写真①: 調査地周辺のシカ

2 調査地と調査方法

八丁1、八丁2、持越川、滑沢の4か所の治山事業地にて調査を行いました。

各調査地ではH15～R5まで山腹工、植栽工が実施されました。



写真②: 調査地（滑沢）

【植生調査】

- (1) 1m×1mのプロットを調査地につき10か所または20か所の計50か所設置しました。
- (2) Braun-Blanquet法によりプロット内に自生している草本の被度と群度を調査しました。
- (3) 調査地ごとの不嗜好性植物の出現頻度等をまとめ、緑化不良の原因について推測しました。

【糞粒調査】

- (1) シカの痕跡の調査として約2～3か月の期間を空けて各2回プロット内のシカの糞粒数を調査しました。

3 調査の結果と考察

八丁1、八丁2の2か所では糞粒などのシカの痕跡が確認されませんでした。八丁1において、森林復旧はまだしていませんでしたが、植被率は高く緑化は進んでいると推測できます。また、不嗜好性植物が繁茂していました。

八丁2は植被率が低く源頭部の裸地化、表面侵食が確認されました。

八丁1、八丁2は山腹工、植栽工を実施してから時間が経過しており、シカの影響は小さいですが、長期にわたって被害を受けた結果一部では表面侵食が発生したと考えられます。

持越川、滑沢の2か所ではシカの痕跡が確認されました。

持越川は植被率が低く全体的に緑化不良が目立っており、シカの糞粒の数が多くシカが頻繁に侵入していると考えられます。

滑沢は上部と下部で緑化の状況に差がみられたため緑化が進む上部と進んでいない下部でそれぞれプロットを10か所ずつ（計20か所）設置しました。上部は不嗜好性植物の被度も植被率も高く緑化は順調ですが、下部は植被率も不嗜好性植物の被度も低かったです。

また、持越川、滑沢はシカの痕跡が確認されたため現在シカの被害を受けていると考えられますが、不嗜好性植物の被度と植被率の割合がいずれも低いのは、持越川も滑沢も現在被害を受けている途中であるため不嗜好性植物が一部ではまだ定着できていないのではないかと推察されます。特に滑沢では不嗜好性植物であるマツカゼソウの被度が高く、持越川では全く見られないため、マツカゼソウが植被率の向上に寄与しているのではないかと考えられます。